

修士 (2019 年度)

在日カンボジア難民 1.5 世の社会的適応プロセス ——他者とのかかわりに注目して——

濱野 敏子

1. はじめに

本研究は、在日カンボジア難民 1.5 世の社会的適応プロセスを他者とのかかわりに注目して明らかにする。なお、「1.5 世」とは、外国で生まれ、学齢期に移住する人を指す。

カンボジア難民が定住して 40 年が経ち、世代の交代が始まっている。生活基盤を築いた 1 世に代って、1.5 世が難民家族の中心となり、地域社会の構成員として活躍している。成人となった 1.5 世、特にインドシナ難民の中でも少数派であるカンボジア難民 1.5 世が、これまでの生活をどのように意味づけ、経験しているかについての研究は少ない。そこで、本研究は、カンボジア難民 1.5 世の社会的適応プロセスの全体像を彼らの視点に注目して検討する。

2. 先行研究と研究課題

アメリカの研究から、移民・難民の子ども (1.5 世と 2 世) の社会的適応は、1) 親の人的資本、2) ホスト国の編入様式、3) 家族構造という要因の組み合わせによって、多様な形態をとることが提示された (Portes and Rumbaut 2001=2014)。日本の移民・難民の子どもの研究からは、言語習得、進学・進路、アイデンティティ形成という共通のテーマが浮き上がった。難民の子どもは、親の難民経験を共有できず、親とのコミュニケーションギャップが生じることが報告された。カンボジア難民 1.5 世の特徴は、1) 難民キャンプでの生活体験を持つこと、2) 親の人的資本に制約があること、3) エスニックコミュニティが未発達であることにあった。以上の先行研究の検討を経て、以下の 3 点を研究課題として設定した。カンボジア難民 1.5 世の 1) 言語習得、進学・進路、アイデンティティの形成はどのように関連付けられ、行われたか、2) 社会的適応プロセスにおける他者との関係はどのようなものか、3) 社会的適応プロセスの特徴は何か。

3. 聞き取り調査と研究データ

神奈川県在住のカンボジア難民 1.5 世 (3 人) と関連する人々 (9 人) への聞き取り調査を行った。N さん (37 歳、女性) は、難民キャンプで生まれ育ち、8 歳の時に両親、弟と来日した。P さん (37 歳、女性) は、5 歳で国外に脱出、難民キャンプに逃亡、7 年間のキャンプ生活を経て、本国へ帰還し、1 年後に再度出国し、13 歳の時に母親、妹と来日した。M さん (36 歳、女性) は、カンボジアで生まれ、3 歳の時に父親が国外脱出、その後日本に定住した父親の呼び寄せによって、母親、妹と 12 歳の時に来日し、家族が再結合した。

4. 第 1 の研究課題：言語習得、進学・進路、アイデンティティ形成

言語習得において、小学校低学年で来日した場合は、日本語がわからずに孤立し、心理的な壁が立ちはだかったが、信頼できる他者の存在によって乗り越えた。一方で、来日を

自覚的にとらえることが出来た中学生の場合は、言語習得の心理的な圧迫は少なかった。学習用語の習得は、移動年齢にかかわらず困難であったが、地域の学習ボランティアの支援によってこの課題を乗り越えた。

高校進学を可能にした要因は、上記の学習ボランティアの支援に加えて、ロールモデルの存在、学習教室に集う友人との励まし合いや情報交換にあった。

アイデンティティ形成において、祖国を知らずに来日したNさんは、ルーツを持つこと自体に戸惑いがあったが、来日後に日本とカンボジアの狭間に位置する自分を確認した。来日前に既に複数の文化を経験したPさんは、日本文化とカンボジア文化の両方を持つことを利点として捉えた。カンボジアから直接に来日したMさんは、日本に生きるカンボジア人としての自覚を持った。3人のアイデンティティの形成の共通点は、第1に、自分でアイデンティティを構築したこと、第2に、カンボジア文化と日本文化の連続帯の中で調整可能なアイデンティティを形成したことだった。

5. 第2の研究課題：他者との関係

他者との関係について、「困難をともにする関係」「依存と支援の関係」「親密な関係と自由な関係」「生き方を見習う関係」「差異を尊重しあう関係」「境界線が引かれる関係」に分類して分析し、以下の要素を抽出した。

第1は、多様性である。何の資源も持たずに、新しい環境に参入したカンボジア難民1.5世は、親にも頼ることができず、エスニックコミュニティの支援体制もない中で、困難を乗り越えるために必要な資源（知識、技術、価値観、情報、自尊心、向上心など）を獲得するために、より広範囲な領域の他者にアプローチしていくことが必要だった。第2は、開放性である。多様性は、閉じる関係からは生まれにくい。1.5世は、同質な人々との関係の中で安心と安全を維持する代わりに、異質な人々との軋轢というリスクをとることによって、自由と可能性を獲得した。第3は、主体性である。開放性を確実にしていくためには、安心と自由のバランスをとる主体性が求められた。第4は、協働性である。1.5世と支援者は、1.5世の困難を解消するという同じ目標に向かって共に働く関係であった。第5に、親密性である。協働の関係の背後には、1.5世の生の全体に対する配慮と、その配慮に対する信頼という関係があった。この関係を媒介するものは、家族の「血」や同国人の「文化」ではなく、社会的な「困難」という事象であった。

6. 第3の研究課題：カンボジア難民1.5世の社会的適応プロセスの特徴（結論）

これまでの研究では、移民・難民1.5世の社会的適応を規定する要因として、親の人的資本やエスニックコミュニティの社会関係資本が強調されてきた。しかし、本研究のカンボジア難民1.5世の場合は、それ以外の多様な他者との困難を媒介にした配慮と信頼に基礎をおく地域の中で創生された人間関係が重要な要因であった。

参考文献

Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut, 2001, *Legacies: the Story of the Immigrant Second Generation*, Los Angeles: University of California. (=2014, 村井忠政ほか訳『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店)